

経済・金融 フラッシュ

ロシア GDP(2023年7-9月期) ーウクライナ侵攻前のGDP水準を超える

経済研究部 主任研究員 高山 武士

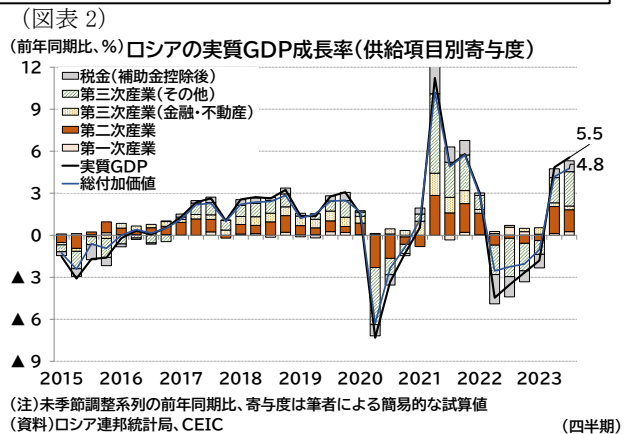
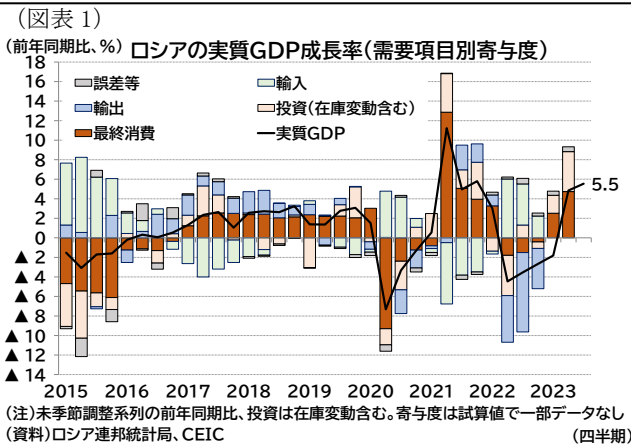
TEL:03-3512-1818 E-mail: takayama@nli-research.co.jp

1. 結果の概要: 前年比で5.5%まで上昇

12月13日、ロシア連邦統計局は国内総生産（GDP）を公表し、結果は以下の通りとなった。

【実質GDP成長率（未季節調整系列）】

- ・2023年7-9月期の前年同期比伸び率は5.5%、前期（同4.9%）から上昇した（図表1・2）

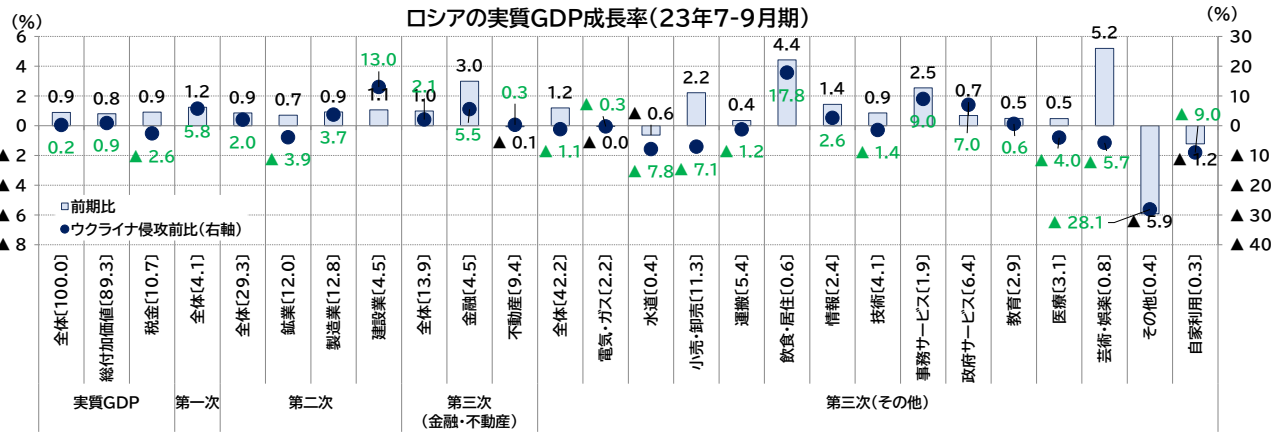


2. 結果の詳細: ウクライナ侵攻直前のGDP水準を超過

ロシアの23年7-9月期の実質GDP伸び率は5.5%となり、11月15日に公表されていた予備推計値(5.5%)と一致した。前年同期比伸び率は4-6月期(4.9%)に続き高水準で、昨年、ウクライナ侵攻後に西側諸国から経済制裁などを受けて大きく落ち込んだ反動(ベース効果)で押し上げられている。季節調整系列の前期比は0.9%(年率換算3.6%)となり、4-6月期(前期比0.9%、年率換算3.8%)とほぼ同じ伸び率を達成し、5四半期連続でのプラス成長となった。

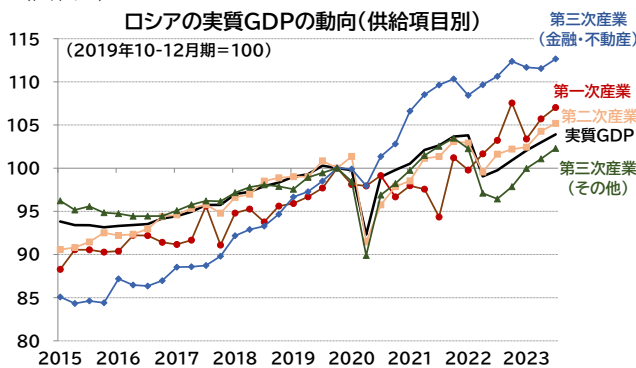
産業別の伸び率は、前年同期比では、第一次産業が3.8%、第二次産業が5.4%、第三次産業(金融・不動産)が1.8%、第三次産業(その他)が6.1%だった。前期比では第一次産業が1.2%、第二次産業が0.9%、第三次産業(金融・不動産)が1.0%、第三次産業(その他)が1.2%といずれもプラス成長となった(図表4)。より細かい産業の伸び率は、その他サービス(▲5.9%)、水道(▲0.6%)といった業種で落ち込む一方、芸術・娯楽(5.2%)、飲食・居住(4.4%)、金融(3.0%)、事務サービス(2.5%)、卸・小売(2.2%)といった業種の伸び率が高く、7-9月期はプラスとなった産業が多かった(図表3)。

(図表 3)



(注)□は2020年の実質GDP全体に対するウェイト、産業分類伸び率およびウェイトは筆者による試算、ウクライナ侵攻前比は21年10-12月期との比較
 (資料)ロシア連邦統計局のデータをCEICより取得

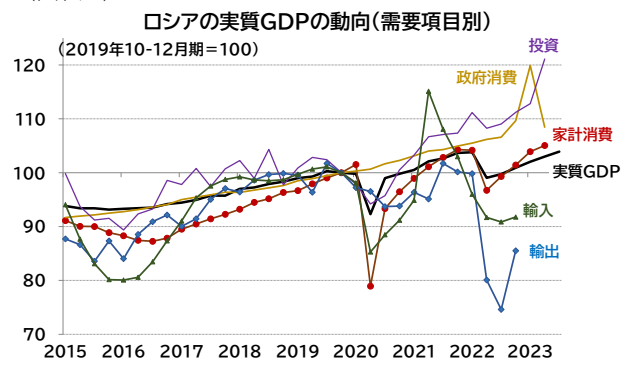
(図表 4)



(注)季節調整系列の19年10-12月期を100として指数化
 (資料)ロシア連邦統計局のデータをCEICより取得

(四半期)

(図表 5)



(注)季節調整系列の19年10-12月期を100として指数化
 (資料)ロシア連邦統計局のデータをCEICより取得

(四半期)

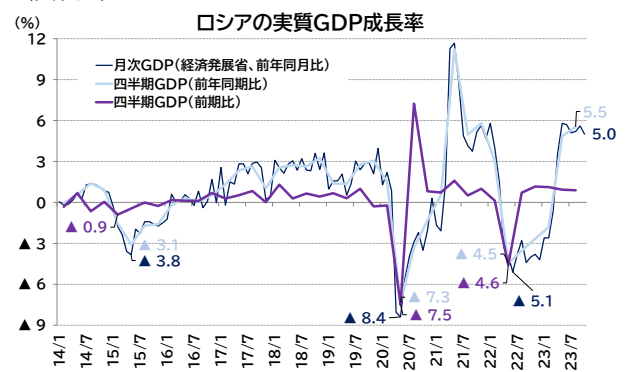
ウクライナ侵攻後の経済状況を確認するために、侵攻前の21年10-12月期と比較すると、GDP全体では+0.2%となり、ウクライナ侵攻前水準を超えた。産業別では第一次産業が5.8%、第二次産業が2.0%、第三次産業（金融・不動産）が2.1%とウクライナ侵攻前水準を超える一方、第三次産業（その他）は▲1.1%とマイナスにとどまっている（図表3・4）。より細かい産業では、その他サービス（▲28.1%）や水道（▲7.8%）、卸・小売（▲7.1%）、芸術・娯楽（▲5.7%）、などのマイナスが目立つ一方で、飲食・居住（17.8%）、建設（13.0%）、事務サービス（9.0%）といった産業が伸びている。

需要別データは最新データも含めて未公表の数値が多いが、4-6月期までの状況を見ると、投資が大きく加速しているほか、家計消費の堅調な成長が確認できる。

7-9月期の名目成長率は前年同期比15.4%（4-6月期は7.8%）となった。GDPデフレ率伸び率は前年同期比9.4%となり、4-6月期（2.8%）より大幅に上昇した（図表5）。

経済発展省が公表する月次のGDP成長率（前年比）を見ると、23年以降は3月までマイナスだったが、4月にプラスに浮上し、ベース効果の押し上げ効果もあり5月以降は5%台での推移が続いている（図表6）。

(図表 6)



(注)月次GDPは経済発展省の推計値
 (資料)CEIC

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。